

## 再び中世の謎について

「狐の丘・八十一后・うほうさいやれ」

三 沢 諄 治 郎

### (1) 狐の丘

本誌第3号（昭和三十四年二月号）に「中近世の謎について」と題し拙稿を掲げたところ、それに対し諸彦から示教を寄せられ感激した。その時の拙稿の主意は、要するに、中近世の謎の中で使われた謎解き語のうち「のく」（退く）という語を用いて、徒然草百三十五段の「うまのきつりやうきつにのをかなかくはれいりくれんとう」を解いて見たいという目的なのであって、これは既に柏原瓦全が「馬退きつ、りやうきつにのをか、中凹れ入り、ぐれんどう」として解いたことが「兩田耕筆」にあり、「馬のきつりやう」を江戸時代の学者たちは「馬の吉良」と解き、「きつにのをか」は「狐の丘」と解いていることなど、すでに周ねく知られて居り、殆ど定説に近いものであるのを、今更らしく述べるのは、どうかしているようだが、拙稿は、これらの解が謎の解として正統な解き方であることを、「五月雨の雲に入りぬる郭公」という謎を引き合いにして証明し、徒然草の「うまのきつ」云々は論なく当時の謎に違いないと言ったつもりである。

所で、その中の「狐の丘」であるが、どこか実在の地名であらうとは思われるが、それについての手がかりが一向になく、どこにでもありそうな名でありながら、さてそれが「馬の吉良」との関連において、どうも都合よく考えつかないのである。

然るに近頃ふと「本朝文粹」の「狐丘之誠」につき当り、おやと感じたが、これは固より中国の地名であるらしく、私のもとめつつあった手近なものとは大分見当がちがう。然し「馬の吉良」と並べて見れば、同じ程度 of 古典語でもあるので、二つの語が何とか結びつかぬかと頭をひねっては見たものの、早急には物になりそうもない。ただ、これが何らかのきつかけとなり、手がかりにならぬものでもないと考えられるから、今は徒らにこじつけのそしりを受けることを恐れて、詳考は後日にまわし、ここに所録の語句をあれこれと留め書きして、大方の名案をまちたいと思う。

○

まず「本朝文粹」巻五に見える菅原文時の文であるが、「九条ノ右大臣（師輔）のために職封を減ぜんと言ふの表」（以下漢文はなるべく

訓読体で掲げる。)の中に、

○「祿は陳紅を致す。恐らくは狐丘の誠しめに乖かむ。」

とある。「陳紅」について日本文学大系では「史記」を援いて、「太倉の粟、陳々相因る、紅腐して食ふべからず。」と注しているが、史記の平準書を検すると「漢興りて七十余年の間、國家に事なし。……京師の錢、巨万を累ね、貫朽ちて校ふべからず。太倉の粟、陳々相因り、充溢して外に露積し、腐敗して食ふべからざるに至る。」とあって「紅腐」の語は無い。さらに「漢書」卷六十四下「賈捐之」の伝には「孝武皇帝、元狩六年、太倉の粟、紅腐して食ふべからず。都内の錢、貫朽ちて校ふべからず。」とあり、これには「陳々相因る」の語が見えない。依つて「陳紅」という熟語は史記と漢書との双方を併せて作爲したものかと考えられる。(文学大系の注は、恐らく「幅文韻府」の「陳紅」の項に従つたものであらう。)

「狐丘の誠しめ」の方は次に引く「狐丘丈人」と孫叔敖との故事に依つて、これ亦、晉三品の創意にかかる句と察せられる。

「列子」(説符)に、

「狐丘の丈人、孫叔敖に謂つて曰く、人に三怨あり、子これを知るか。孫叔敖曰く、何の謂ぞや、対へて曰く、爵高き者は人これを妬む。官大なる者は主これを怨む。祿厚き者は怨みこれにおよぶ。孫叔敖曰く、吾が爵益々高くして吾が志益々下り、吾が官益々大にして吾が心益々小に、吾が祿益々厚くして吾が施し益々博く、是を以て三怨を免かる、可ならんか。」

右によれば「狐丘の誠しめ」とは爵位官祿の高大なる者は、人から怨

まれ易い故、常にこれに対応する態度をもつて臨み、怨みを避けなければならぬ、の義と解せられる。

右の列子を引いたと思われる文が「淮南子」の道応訓にもある。但し、「爵高き者は士これを妬む」祿厚き者は怨みこれに処る」となつて居り、又、その文末に「故に老子曰く、貴は必ず賤を以て本と爲し、高は必ず下を以て基となす。」の句が続いて義理を補っている。

愚按するに、この「狐丘の誠しめ」を日本流に言う時は「狐の丘のいましめ」とも言い得るだらう。さらに「狐の丘」だけで「狐の丘のいましめ」を代表するということも無いわけではあるまい。例えば、「孟母三遷の教」を単に「三遷の教」と略し、進んでは「三遷」とか「三徙」とかだけで、それが孟母の教えであることを示しているようなものである。だが、そうかと云つて、これを以て直ちに徒然草の謎に結びつけようとするのは、今のところ相當な飛躍と云わねばならぬ。

○ 一体「狐丘」とは何だらう。

列子に「狐丘丈人」とある、その注に、

○ 狐丘は邑名。丈人は長老なる者。

と見え、まず地名であることはわかるが、又、中国人名大辞典の卷末に附せられた「姓氏考略」によると、「狐丘」という姓があり、これを解説して

○ 狐丘は即ち靈丘。

○ 「世本」に、晉の大夫、狐丘林の後。

○「英賢伝」に、狐丘封人の裔。

と見える。「英賢伝」は明らかでないが、「世本」は漢の宋衷撰とせられるから、この晉は春秋戰國時代のそれを指すであろう。注目すべきは「狐丘」と「壺丘」とが同一内容の異称とせられる点で、「左伝」にも、

○「楚、陳を侵す。陳、壺丘に克つ。」(文公九年)

の注に「壺丘は陳の邑」とあり、又、

○「諸れを壺丘に置く。」(襄公元年)

の注に「壺丘は晉の地。河東、東垣の東南に壺丘あり」と見える。「狐」も「壺」も「狐」も模韻「胡」の同音同韻であるから、同一の地名に三字が通用せられたものと察せられる。その所在に至っては、長い間にいろいろな異説が生じたのであろう。

右のように、姓氏の上でも地名の上でも狐丘が壺丘だとすると、前記した「世本」の「狐丘林」と列子に類見する「壺丘子林」との近似に疑問が涌き、「英賢伝」の「狐丘封人」と列子の「狐丘丈人」との相似にも注目せざるを得ない。

列子が壺丘子林に師事したことは、同書に、

○子列子、既に壺丘子林を師とす。(仲尼)

○子列子、壺丘子林に学ぶ(説符)

と見え、

○列子、これを見て心酔し、帰りにて壺丘子に告げて曰く、

(黄帝)

と云うように、以下「壺丘子」或は「壺子」という名が頻りに出て来

る。これは皆「壺丘子林」のことであらうし、この場合の「子」が敬称であるとするならば、その名は「壺丘林」で即ち「狐丘林」と同一人物ということになるのではなからうか。

○

以上を要するに、「狐丘」なる語が「本朝文証」に在るといふことは、平安末期から鎌倉期にかけての貴族の教養の中に、この語がはいり込み得るといふことを十分に示しているであらう。

然し、この語が如何にして兎軍の口にする謎の中に転入していったかという点になると全く不明である。われわれは、ここまではあながち無理な想像とは言えないのだが、これから先きのことは何とも目あてがつかかねるのである。

なお序に云うと、「狐」と「丘」との結合した句に「狐死首丘」という有名な句がある。これは「礼記」の檀弓から出発して「楚辞」の九章にも、「淮南子」の説林訓にも「後漢書」の班超伝にも見える。「狐は死するとき丘に首す。」で、「胡馬北風に依り、越鳥南枝に巣くふ。」(古詩)と慈義が通うものであり、その本を忘れぬを賞めたのである。礼記には「古の人、言へるあり、曰く、狐は死する時正しく丘に首するは仁なり。」と云っているが、後には転じて故郷恋々の情を訴えるのに用いている。

楚辞は「鳥は飛びて故郷に反り、狐は死するとき必ず丘に首す。信に吾が罪にあらずして棄逐せらる、何ぞ日夜にこれを忘れん。」と歎じ、後漢書の班超は「久しく絶域に在り、年老いて土を思ふこと十二年」上疏して曰く、「臣聞く、太公、齊に封せられて五世周に葬る。狐は

死する時丘に首し、代馬は風に依ると、夫れ周齊は同じく中土千里の間に在り、況んや遠く絶域に処るに於いて、小臣能く依風首丘の思ひなからんや。」と訴えている。魏の武帝の如きも「却東西門行」という詩に、「戎馬、鞅を解かず、鎧甲、傍を離さず、再々として老い將に至らんとす、何れの時にか故郷に反らん。神竜は深泉に藏れ、猛獸は高岡に歩す、狐は死して首丘に俯る、故郷いづくんぞ忘るべけんや。」と歌った。

これらは「狐丘」とは直接に関係が有りとは思えぬが、その普通度においては「狐丘の誠しめ」以上のものがあるように思うので、ここに略記して後考を俟つ。

## (2) 八十一后

前記した拙稿「中近世の謎について」では、後奈良院御撰「何首」のうちで、接合・添加・消除・逆説などのやさしい例を二、三十挙げたが「何首」に収められた一九三題の中には勿論難解なものも少なくはない。そのうちの二つ、

(124) 八十一のきさき、きらがさね。

(こしき)

について「八十一」がどうもわからず、本居内遠翁も「此何首一部の中の難物にていかにも解きがたし」と言われ、翁の注記せられた「八十一女御といふことあり。」云々の意もはっきりとつかめぬままに十六年が経過してしまつた。他に忙しい研究題があつたりして深くさぐるひまを失つたのである。ところが近頃ゆっくりとした気もちで読書し

ているうちに「八十一の後」が礼記によるものであることに気づいたので、まことに遅過ぎながら、ここに一応書き留めておきたい。

礼記の「釋義」の篇に六宮六官のことを述べ、

「古は天子の後、六宮を立つ。三夫人・九嬪・二十七世婦・八十一御妻、以て天下の内治を聴き、以て婦順を明章にす。」

とある。三・九・二十七・八十一というのは次第に三倍した数字である。

右によれば六宮と云いながら四階級しか表記せられていないが、同じ礼記の曲礼下篇に、

「天子に后あり、夫人あり、世婦あり、嬪あり、妻あり、妾あり。」とも見えるから合せて六宮ということになる。そして、之に對する六官としては「三公・九卿・二十七大夫・八十一元士」を挙げている。

これから考えると、何首の「八十一のきさき」は礼記の「八十一御妻」の和称に違いない。そうだとすれば、何かの儀式に、この多数の後妃が綺羅をかざって参列した様子は、想像するだけにきらびやかなものであるだろう。然しそれは後世のよくする所ではなく、殊に日本においては諸制の髓を漢土にとつたにしても、到底まねもできぬことであつたらう。

漢土においてさえ、古制として古典に残っている位なもので、歴朝みな此の制を保持したわけではあるまい。尤も漢の王位を奪つた王莽の伝によれば、杜陵の史氏の女を皇后として迎えた時の儀式に、

「上西堂に和・嬪・美、御を備へ、和人三位は公を祝し、嬪人九は卿を祝し、美人二十七は大夫を祝し、御人八十一は元士を祝す。」

云々に見えるから、この豪華を張った人が有るには有ったのである。然し、札記にさえ「古は」とある位だから、何故がこれを「古式」と称したのは極めて当然なことであつて、答として挙げた「こしき」の衷の意は「瓶」即ち蒸飯器のそれであらう。徒然草の第六十一段に

「御産のときこしきおとすことは……」  
が想起せられるその「こしき」である。

かくて「八十一」の数がわかりさえすれば、この謎は至つて平凡で容易な問題と化してしまふ。

(3) うほうさいやれ

同じく何曾の中の難題と思われるものに、

(123) 三十六町さきにふくろう鳴きて都遺戸たまらず。

(一りうほうさいやれ)

がある。内違翁は

①三十六町さきは一里なり、ふくろうのなく声はウホウホときこゆるなり。

②部も遺戸も物のさかひにありて際サイの意なり。

③たまらずは破れ損じたる意なり。

④つらねて見れば、「一里ウホウ際破れ」と解くなり。

⑤さて此語、何の意か、今世にてはさかぬ語なるを、考ふるに昔の神祭の練物風流のはやし辞なるべし。

⑥一流は、くさぐさの中の一種の風流の意。

⑦ほうさいは報賽か報祭かの意にて、もと祈願成就の御謝の爲め出せる意なるべし。

⑧やれははやし辞なり。云々とあり。つづいて「ほうさい」に泡齋念仏、法齋、法西寺などを考え、結局、狂人をはやす語なるべしと結んでいる。

○  
今、愚考するに、翁の①②は正にその通りと考えられる。ただ、④の「際破れ」は甚しくこじつけの感がある。翁が⑤で昔の神祭の練物のはやし辞なるべしといったのは、まことに岡屋といったところであらう。

さて先日、ラジオで下鴨社の祭りのニュースがあつて、この祭は俗に「さんやれ祭り」といい、「さんやれ」は幸いあれの意味なそうですとアナウンサーの解説を聞いて横手をうつ思ひがした。それと共に折口博士の芸能史講話の中の反閑(ヘンバイ)という語が思い合わされる。叙述を簡にするために、まず日本歴史大辞典のそれを引くと、

「反閑」、陰陽師呪法の一つ。古く天皇や貴人が出御される時に陰陽師が呪文を唱えて足踏みを行い、邪悪を払った。三足、五足、七足、九足など、時に応じて特別の作法があつた。足踏みであるがゆるやかに進んだので、禹歩ともいわれた。中世の武家や武士も出陣、出立の際には自ら反閑を踏んだ。それぞれ特殊の呪文と作法を伝えていた。(猪熊氏担当。圈点、傍線は今施す。)

一名を「禹歩」といったことは最も注目すべき点で、「広辞苑」にも、

「反閑、反閑」

天皇又は貴人の行幸、神拝、出行などの時、陰陽家の行った呪法。邪気を払い、正氣を迎え、幸福を開くものという。

「禹歩」

貴人外出の時、陰陽家が呪文を唱えて舞踏する作法。反閑。

とあり、なお此の呪法について折口博士は、(失礼ながら今必要な部分だけを飛び飛び引く。)

①桜町・土御門の男たちなどは、忬この呪術を行ふ能力をもって居ったと云うてよい程です。―そして、これらの人たちの呪術の一番大事のものが反閑であつたのです。

②つまり、口で唱へ言をしながら足踏みする訳ですが、その唱へ言は、大抵五字か七字或は九字の漢字を並べた文句になっています。③これが鎌倉時代には非常に盛に行われたやうに、記録の上には現れて来ます。

④支那では反閑に似た内容を持つ古い語は(中略)夏の禹王が長い間かかつて治水事業を成し、土地を踏みしづめたとの由来で「禹歩」というのがあります。(日本芸能史六講より)

など言うて居られる。中国の古典では荀子に「禹跳」ともいって、凡そ歩履相過ぎざるものを禹歩といひ、又、禹は水土を治め、山川を涉つて足を病んだので、行くに跛であつた。俗巫は多く禹歩に倣つたとある。足過ぎざるものとは足の長さ以内の歩幅で歩くことらしい。

○

そこで、この謎を解く段になって、「さいやれ」は必ず「さんやれ」の誤伝か誤字であろうと考える。「棧破れ」でこそ戸障子の竹が破れる即ち「たまらず」となるので、仮名の「ん」と「い」との誤写かと思う。「やれ」には江戸期の例だが、

○窓を破れと梅はころびぬ大家中(其角、五元集)

などが見える。左に題と答とその心との三者を並べて見ると、

(題)三十六町さきに、ふくろう鳴きて、都遣戸たまらず。

(答)一り、ウホウ、棧破れ。

(心)一里 禹歩(う) さんやれ(幸あれ)。

即ち、答と心とは表裏の意味を持つ。心の示す意味は、右の反閑の文句で、「これより一里の間、この度の御他行に、邪気なかれ、幸いあれ。」という呪言なのではあるまいか。この呪語は無論口の中だけで秘密に唱えるものであつたらうが、前記のように、おいおい武士などが自身で行なつたという事などから考え合わせると、相当に俗間に流伝した文句であらう。

然し、右の私解には少なくとも二つの大きな疑点がある。

①一里という語が果たしてこれよりさきの義か、又は一里四方の義か或は全く別な義か、明らかでない。

②「うほう」に対して禹歩を当てると終りの「う」が多くなる。或は恐らく、唱え文句の調子を伸ばす上から「うは」が「うほう」と唱えられたのだからと思ふが、確言し難い。

更に臆測すると、下鴨社の祭などに、昔はこの呪語が唱えられ(神拝の折にも用いるとあるのから連想して)、その尾について参列の人々が「さんやれ、さんやれ」とはやししの声を合わせたのではなからうか。それから此の祭りを「さんやれ祭」といふようになったといふのであれば万事都合だが、そううまくは行かない。その点、下鴨社について詳細をうかがうのが本筋であるが、今その暇がなく、原稿の締切りに迫られるままに、これ亦留め書きにして置き、後日に詳考したいつもりである。大方の御示教を乞ふ。(一九六一・三・四)